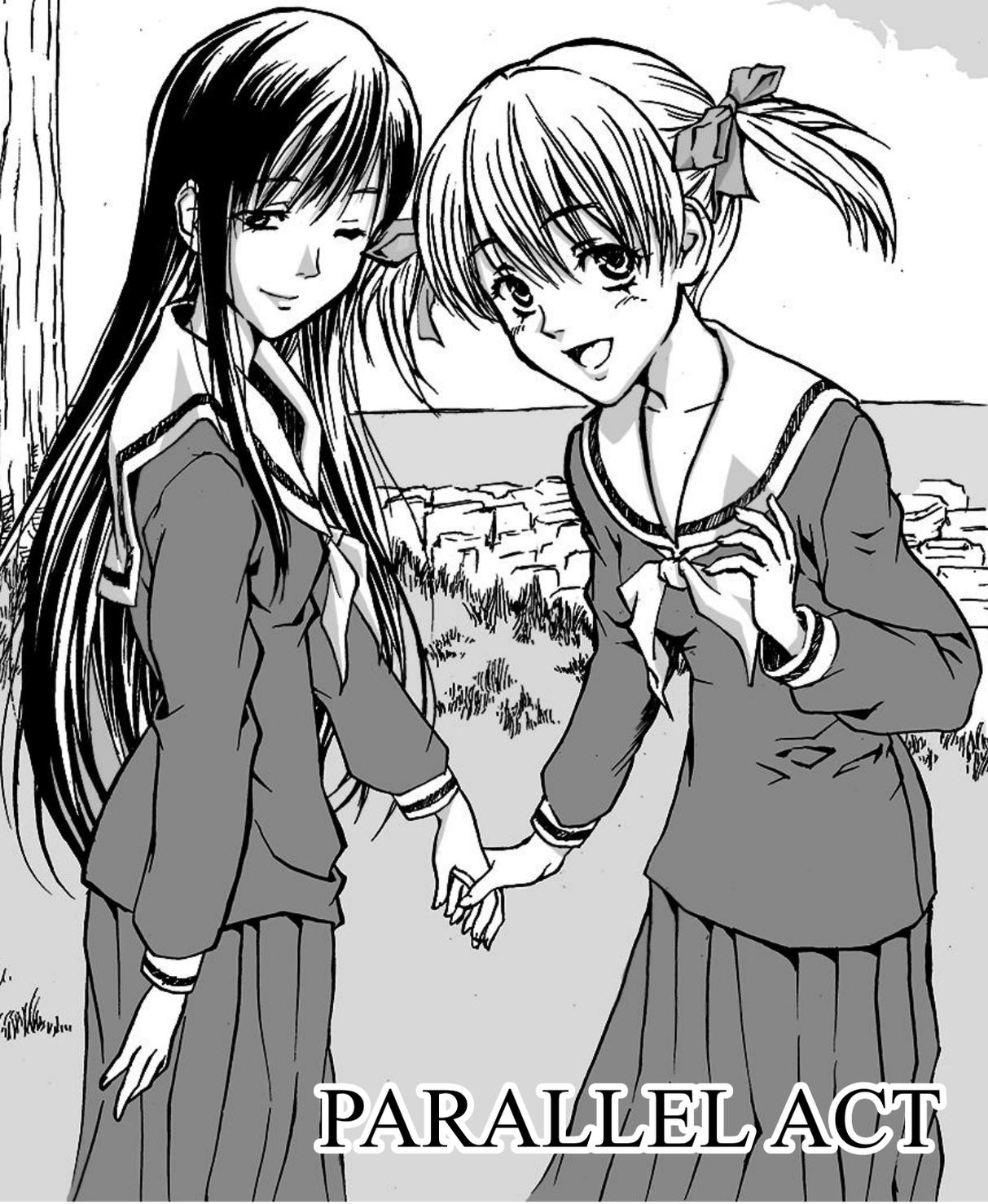


マリア様が望む永遠



PARALLEL ACT

マリア様が望む永遠

もくじ

プロローグ	7
再会	16
祐巳の不在	21
再姉妹	38
あとがき	48

イラスト／ロンゲ魔神K

マリア様が望む永遠

「ごきげんよう」

「ごきげんよう」

さわやかな朝の挨拶が、澄みきつた青空にこだまする。

マリア様のお庭に集う乙女たちが、今日も天使のような無垢な笑顔で、背の高い門をくぐり抜けていく。

汚れを知らない心身を包むのは、深い色の制服。

スカートのプリーツは乱さないように、白いセーラーカ

ラーは翻らせないように、ゆっくり歩くのがここでのたしなみ。もちろん、遅刻ギリギリで走り去るなどといった、

はしたない生徒など存在してはいようはずもない。

私立リリアン女学園。

明治三十四年創立のこの学校は、もとは華族の令嬢のためにつくられたという、伝統あるカトリック系お嬢さま学校である。

東京都下。武蔵野の面影を未だに残している緑の多いこの地区で、神に見守られ、幼稚舎から大学までの一貫教育が受けられる乙女の園。

時代は移り変わり、元号が明治から三回も改まった平成の今日でさえ、十八年通い続ければ温室育ちの純粹培養お嬢さまが箱入りで出荷される、という仕組みが未だに残つ

ている貴重な学園である。

夏休みも終わって新学期。何かが起こりそうな予感。今日も山百合会は忙しい。もうすぐ花寺学院の学園祭。それが終わったなら、リリアン女学園の体育祭も待っている。

そんな時、山百合会にもお休みができた。当然行くのは遊園地。祥子さまと二人だけのデート。きつと楽しいものになる。一生忘れられないものになる。

プロローグ

1

「あら、あなたたちもなの？」

「ごめん。いつも通り、夜に行われるものとはかり思ってたから」

「あなたが謝ることじゃないわ。気にしないでいいのよ」

時は九月。花寺学院の学園祭も、リリアン女子学園の学園祭も近くなり、山百合会幹部は日曜日も必ず登校する。しかし、次の日曜日、志摩子さんは実家の小寓寺を手伝わなくてはならず、登校できない。それに加え、支倉・島津両家の会食が昼から行われることになっていて、黄薔薇姉妹も登校できないと分かったのだった。

「困ったわ。じゃあ、次の日曜日に登校できるのは私たちだけね」

そう言つて、祥子さまは祐巳を見る。正確には乃梨子ちゃんも登校できるのだけど、ロサ・キガンティア白薔薇さまである志摩子さんが

登校しないので、何となく来づらいかもしれない。

「私なら、その日は大丈夫ですけど」

そうでもなかった。乃梨子ちゃんは、仕事を真面目にこなすタイプ。

「いえ、せっかくだからお休みにしましょう。ずっと登校しっぱなしだと祐巳も疲れるでしょうっ？」

「そうですね。たまにはゆっくりと休みましょう……。あ、ずっとくすぶっていた、あることを思い出す。」

「どうしたの？ 祐巳」

「遊園地に行きませんか？」

「遊園地？ それなら夏休みになる前に断ったでしょう？ 混んでて暑いのは苦手だって」

祥子お姉さまの眉間みげんにしわが寄る。

「九月になったので、夏休みほど混んでないし、大分涼しくなりましたよ」

「それでも、混んでることや暑いことにはかわりないわ」

「少しくらい混んでた方が遊園地は楽しいんですよ」

「せっかくの休みなのに、わざわざ疲れに行つてどうするの？」

「お姉さまとだったら、疲れなんて吹っ飛びます」

祐巳は祥子さまに食い付いて離れない。冬まで待ったら、以前約束した通り遊園地と一緒に行ってくれるんだろっけ

ど、やっぱりそれまで待てない。

「お姉さま、私と遊園地に行きたくないんですか？」

「そんなこと言っていないわ。時期をずらすって言うだけよ」

「お姉さまは、遊園地に行かれたことはないんですよね？」

「そうよ、いけない？」

「冬まで待つてたら、お姉さまは他の方と遊園地に行かれることがあるかも知れないのですよね？」

「そんなことはないわ」

「私、お姉さまと初めて遊園地に行く人になりたかったのに……」

ちよつと拗ねてみる。少し上目使い。でも、祥子さまの顔は段々険しくなってくる。これは逆効果だったか？

「分かりました。じゃあ、私一人で行きます……」

このまま言い争っても、得るものはない。それに、祥子さまを怒らせてしまって、冬まで待つたら確実に遊園地に行ける筈だったのが、それまで反故になりかねない。

「分かったわ……。今度の日曜日、遊園地に行きましょう。まったく、祐巳の我がままにも困ったものね」

祥子さまに我がままと言われたらお終いだ。でも、喜んでお礼を言う。心なしか祥子さまが、はにんかんでいるように見える。己惚れだろうか？

そこに、由乃さんが耳打ちしてくる。

「祐巳さん、祥子さまの操縦、上手くなったわね。今度は了承させた」

「えへ♡」

誰かが言ったような科白を聞いて、祥子さまに見えないように、こっそりと舌を出す。

「きつと、『初めて』ってのが効いたのよ」

「そうかな？」

「そこ、何をこそこそ話しているの!？」

「はい、すみません!」

祐巳と由乃さんの声が八モった。

2

「聞きましたわ、祐巳さま」

「聞いたって何を？」

「とぼけないでください。祥子お姉さまとのデートのことです」

「ああ、そのこと」

暫くした土曜日の放課後、どこから嗅ぎ付けたのか、瞳子ちゃんが祐巳に食ってかかってきた。

「この忙しい時期にデートですか？」

「明日は、令さまや志摩子さんも来れなくて、仕事にならないのよ」

「だったら、休んで鋭気を養っておけば良いじゃありませんか？」

「だからデートで養うんじゃない」

「祐巳さまはドラキュラですか？」

「ドラキュラ？」

これは初めての例えだ。怪獣の子供とは言われたことがあっても、妖怪のたぐいに例えられたことはない。でも、怪獣の子供と妖怪と、どっちがましだろうか？

「祥子お姉さまの精気を奪って元気になるうだなんて……」

「私、お姉さまを噛んだりしないわよ」

「当たり前です！ 例えなんですから」

瞳子ちゃんは、大きく腕を振り下ろして否定する。

「しかも、聞けば、遊園地だと言っではありませんか」

「うん、前から約束してたの」

「遊園地だと、余計に疲れるんじゃないやありません？」

「ううん、お姉さまと一緒に疲れない」

それに、祥子さまはジェットコースターのような、高い場所や激しい乗り物はお嫌いだから、落ち着いた乗り物だけに乗ることになり、そんなに疲れないと思う。

「祐巳さまでなくて、祥子お姉さまのことを言ってるんで

す。それに、祥子お姉さまが人混みがお嫌いなのは知っていますでしょう？」

「でも、遊園地は少し混んでないと楽しくないよ」

「それはそうですけど、祥子お姉さまのことを少しはお考えらしたらいかがです？」

それはその通り。デートコースと言っても、混まない所や、涼しい所は幾らでもある。でも、今は遊園地以外考えられなかった。

「私なら、祥子お姉さまが満足されるようなデートコースを選びますわ」

「えっと、それは瞳子ちゃんが祥子さまとデートしたいってこと？」

「!? そう言うことを言ってるんじゃないやありません!!」

顔をブンブンと振って否定する。それにっられて、髪の毛が激しく揺れる。

「じゃあ、瞳子ちゃんは、祥子さまとデートしたくないんだ？」

「そんなの、したいに決まってるじゃないですか!」

「ほら、やっぱり」

「ううん」

瞳子ちゃんが、顔をひしゃげて悔しがる。なんとなく、言いたいことがあるけど、言えないで我慢しているように

も見える。

「もういいです!! 祐巳さまは、祥子お姉さまとお二人で遊園地を楽しんできてください!」

「うん、そうする♡」

にこやかに微笑む。瞳子ちゃんの怒りがさらに増した。

「!! まったく、人の気も知らないで! やっぱり、祐巳さまなんて大嫌いです!!」

「あ、ちよつと……」

瞳子ちゃんは、頭に湯気を立ち上らせながら、振り向きもせずに行って行く。

「ちよつと、言い過ぎたかな?」

流石にここまで怒らせてしまうと反省してしまう。今度会ったら、謝ろうと決めた。

「まったく、鈍感なんですから……」

祐巳から離れて、大分経った後、瞳子は小さく呟いた。

3

街中を、長い黒髪をなびかせて、颯爽と歩いている女性がいる。ピシヤリと伸びた背筋が凛々しい。スラリとした

細い足に、ジーパンが似合っている。

「ごきげんよう。祥子お姉さま」

「あら、瞳子ちゃん。ごきげんよう。奇遇ね、こんな所で」

「ええ、偶然通りかかったのよ」

祐巳との待ち合わせ場所に向かっている祥子の前に、縦ロールの少女が現れた。「偶然」そんなこともあるのだからか? こんな、普段歩かない場所です。

「せっかくですので、お茶でも一緒にしませんか?」

「ごめんなさい、この後待ち合わせがあるの」

瞳子ちゃんの顔が一瞬曇る。しかし、直ぐに明るく振る舞う。

「なら、そこまでお付き合います」

と言って、隣に並んで歩きだした。誰と待ち合わせをしているのかは、二人とも口に出さなかった。

暫くすると、道ばたで指輪などのアクセサリーを売っているのが目に入る。

「祥子お姉さま、ちよつと覗いて行きましょう?」

「そうね、少しだけならよいわよ」

普段、宝石店で見かける指輪と違い、宝石など付いていないシンプルな物が多い。もつとも、こんな所で本物の宝石を売っていたら盗難が相次ぐだろう。また、ここでは指輪だけでなく、ペンダントなども売っている。瞳子ちゃん

も、指輪は宝石店の物を普段見ている筈だが、露天のアクセサリーを食い入るように見つめている。逆に普段見慣れていない分、新鮮なのだろうか？

「祥子お姉さま、これ、欲しいなあ……。瞳子にプレゼントして頂けません？」

瞳子ちゃんの指の示す先に、キラリと光る指輪がある。もつと良い指輪を持っているのに、どうして露天の指輪を欲しがるのだろうか？

「あら、このような指輪が欲しいの？ それに、ここで買わなくても、いつもの店で買えば良いでしょう？」

「いえ、瞳子、この指輪が欲しいんです。それに、指輪は自分で買うよりも、プレゼントされる方が嬉しいじゃないですか」

いつもの我がままとは何か違う。目がつるつるとして、いつもよりも真剣だ。

「分かったわ。もう、しょうがない娘ね」

「ありがとうございます。祥子お姉さま！」

こうして、無理を言っただけで買った指輪を、瞳子ちゃんは早速左手の薬指にはめた。嬉しそうで、それでいて悲しそうな複雑な表情をして、指輪を眺めていた。

瞳子ちゃんが左手を眺めているのにつられて、祥子も自分の左手を見る。意外と時間が経っていて、待ち合わせの

時間に遅れてしまいそうだ。

「ごめんなさい、瞳子ちゃん。もう時間がないわ」

「そうですか、それでは仕方ありませんね。どうぞ先に行かれてください」

「ごめんなさいね、また明日。ごきげんよう」

「ごきげんよう、祥子お姉さま……」

「どうぞ、楽しんでらしてください……」

小走りに去って行く祥子お姉さまを、軽く手を振って見送る瞳子。悲し気な顔でもう一度指輪を見ると、振り返った。

「ねえ、お兄さま、この指輪」

（まったく、瞳子ちゃんにつきあってたら、遅れてしまったわ）

祥子は、祐巳との待ち合わせ場所に急ぐ。余裕を持って家を出てきた筈なのに、瞳子ちゃんにかまけてたらすっかり時間を消費してしまった。

（あの娘、どうしてあんなに駄々をこねたのかしら？）

普段から我がままな娘ではあるが、「物を買って」とせ

がまれたことはない。お互い、買い物に困ったことはないからだ。

少し気になりつつ急いでいると、隣の道路を、救急車がサイレンを鳴らしてすれ違う。

「嫌だわ」

救急車が走ると言うことは、急病か、事故が起こったと言うこと。見ず知らずの人とはいえ、気分が良いものではない。それに、この救急車は何かが違っていた。それが何なのかは分からないが。

待ち合わせ場所に近づくと、そこに人だかりができていくことに気付く。

「何かしら？」

その人だかりに近づくと、段々と気分が悪くなってくる。

「トラックが突っ込んできたらしいぞ」

「女の子ですって……」

(女の子……?)

祥子の心拍が、段々と早くなる。悪い予感がする。人混みを掻き分けて、前に進む。

「デートの待ち合わせだったのかしら？」

「可哀想に……」

「まだ高校生だろ？」

人にぶつかりながら、押し退けながら前に進む。なりふりかまっていられない。

「すみません、通して、通してください……」

息を呑む。目の前に広がる惨状。辺り一面にガラスが散乱している。ブレーキを踏まれなかったのか、ブレーキ痕は無い。軽トラックの前面左側が電話ボックスにぶつかり、電話ボックスは完全にひしゃげている。ぶつかった勢いで回転したのか、歩道のガードレールも潰して、車体が歩道に乗り掛かっている。運転席のドアは開いていて、中にはいない。おそらく、既に運ばれたのだろう。

ゆっくりと視線を下に降ろすと、血の海が広がっている。運転席には大した血痕は無いことから、被害者の血液だと思われる。その海の中、祥子はある物が目に止った。

『リボン』

血の海の中、^{くれない}紅色のリボンが落ちていた。いや、紅色ではない。紅色に染まったりリボンが落ちている。その元の色、形、祥子には見覚えがあった。

祥子は、その場から動けなかった。じっと、リボンの元の色が失われ、完全に紅色に染まるのを見つめていた。いや、「見つめていた」と言う表現も適切でないのかも知れない。祥子の頭は空白になり、ただ「目に映っていた」状態だったのだから。



通してくだ
さい・・・

すみません
通して、

Keep Out Keep Out

Keep Out Keep Out Keep Out

そう、そのリボンは祐巳のリボン。祥子の最も大事な妹のリボンだった。

5

病院の廊下、急ぐ足音。流石に走るわけにはいかないの
で、小走りの音がする。

「祥子さま!!」

由乃が声をかけるが反応がない。祥子は、宙を虚ろに見
つめたままだ。

紅色のリボンを固く握りしめたまま、宙を向いている。

「あなた達も来たの?」

祐巳、そして由乃の担任の先生が、由乃と令に声をかけ
る。事故の連絡を受けた直後、祐麒は由乃と志摩子、そし
て担任に電話をかけていた。由乃はその時、島津・支倉両
家の会食、志摩子も小寓寺の手伝いで留守。唯一担任だけ
に連絡がついたので、既に駆けつけていたのだ。

「祐麒さんから、留守電が入っていて。それで、祐巳さん
は!?!」

「まだ手術中なの……。どうなのかは、全然分からないわ」
「そうですか……」

留守電が入っていた時間は十一時二十五分。もう六時間

になるうというのに、まだ手術は続いている。

「祥子! 祥子!! しっかりして!!」

令が祥子を揺さぶる。事故現場で気を失った祥子は、祐
巳と同じ病院に搬送されて来ていた。気を失っただけなの
で、身体には特に異常はないのだが、心ここにあらずと言っ
た様子だ。時折、うわごとで「祐巳……、祐巳……」と呟
いている。

「令さん、由乃さん。来てくれて、ありがとうございます」

祐麒と祐巳の父の祐一郎が、令と由乃に声をかける。祐
巳の母のみきは、祐一郎の肩にうなだれ、声が出せない。
祐麒が祐巳の家族の中では、一番しっかりしているように
も見えるが、顔は青ざめ、手が僅かに震えている。

「一体何! どうしたの? 何があつたの!?!」

祐麒に由乃が詰め寄る。

「僕もよく分からないんですが、トラックが突っ込んだら
しいんです……。しかも、ブレイキ痕が無かつたって……」

祐麒が、拳に力を込める。無理もない。実の姉が理不尽
な事故の犠牲者となつたのだから。

「由乃さん……」

志摩子がゆっくりと立ち上がる。用事と言っても、同じ
敷地にある小寓寺。留守電を聞く機会は由乃よりも早かつ
たので、早めに病院に来ることができた。しかし、存在を

気づかせない程ショックを受けていた。

「志摩子さん、大丈夫？」

志摩子は一人では立てないらしく、乃梨子に付き添われている。小寓寺でも当然葬式は取り扱う。事故死も少ない。この間も、子供の頃遊んでくれた檀家のお爺さんが亡くなったばかりだ。つい重ねてしまうのだろう。

「祐巳さん、どうなるのかしら？ もしこのまま……」

「縁起でもないこと言わないでよ!!」

「でも、私、私……」

由乃も泣きたい気持ちは分かる。

「手術くらい、私も受けたことあるけど、ちゃんと生きてるわよ!」

「でも由乃、心臓の手術と事故は違う……」

「令ちゃんは黙ってて!!」

こんな病院とこでまでコントをしなくても……。しかし、計らずもその場を和ませる。

その場に、さらに一人の少女が現れる。縦ロールを激しく揺らしながら。瞳子は、清子小母さまから連絡を受けて、この病院を知って来た。しかし、瞳子が来たことよりも、皆は手術中の赤ランプが消えたことに注視する。手術室の扉が開く。

「祐巳!!」

「祐巳さん!!」

「祐巳ちゃん!!」

手術室から出てくる搬送用ベッドに皆がすがり付く。

「祐巳! 祐巳い!!」

祥子は、ベッドにすがり付いて悲痛な叫びを上げる。涙で顔はボロボロ。でも、誰もそれを気にする者はいない。運ばれて行く祐巳と、ボロボロの祥子さまの様子を見て、瞳子は動くことができなかった。溢れた涙を拭うこともできなかつた。口を押えた手の、左手の薬指に、祥子に買ってもらった指輪が光っていた……

再会

1

「ごきげんよう、紅薔薇さま」

「ごきげんよう」

桜の花びらが舞う中、紅薔薇さまと呼ばれて私は返事をする。しかし、私は今も悩む。本当に私が紅薔薇と名乗って良いかを。確かに私は先代の紅薔薇さまからロザリオを受け継いだ。生徒会役員選挙で信任されもした。自分でも紅薔薇と名乗っている。でも、私は大事なことを精算していない。それが終わらないと、真の紅薔薇では無い気がする。

「ごきげんよう、紅薔薇さま。何を暗い顔してるの？」

おかつぱ頭の少女が私に声をかける。

「あら、白薔薇さま、ごきげんよう。私、そんなに浮かない顔してまして？」

「してるわ。あなた、『紅薔薇さま』と呼ばれる度に暗い

顔になるのよ」

「そうですの？」

自分でも心当たりがあるので、強く反論できない。

「『紅薔薇さま』と名乗る決意をしたんだから、もっと毅然としなさい」

「そうね、そうしますわ」

そう、いつまでも過去に捕われてはいけけない。未来を向かなくては。もう、あの過去へは戻れないのだから。こんな、今の私を見たら、あの人も喜ばないだろう。いつかあの人が戻って来ても、恥ずかしくない生き方をしなくては。それが、私の、あの人に対する義務。あの人を、あんな目に遭わせてしまった私の義務、罪の償い。あの人代わりに紅薔薇を名乗っている私の義務。いつかあの人に、紅薔薇の名前を返すまで、紅薔薇の名前に泥を塗るわけにはいかない。

決意を新たに、マリア様を見上げる。左右の縦ロールが揺れる。

2

トルルルル……

『はい、小笠原でございます』

使用人だろうか？ 婦人の声がする。

「私、花寺学院大学一年、福沢祐麒と申します。祥子さんはご在宅でしょうか？」

『お嬢様ですか？』

電話の相手が不審がる。若い男からの電話だと警戒して当然だろう。

「祥子さんの…、妹の、祐巳の兄です」

「少々お待ち下さい」

祥子さんや清子小母さん相手だと名前だけでも通じるのだが、使用人相手だと説明しなければならぬ。一部の使用人だと通じるのだが、全員が全員、主の家族の交友関係に通じているわけではない。

『今、お繋ぎいたします』

保留音の後、祥子さんが電話口に出る。

『もしもし、祐麒さん？ ごきげんよう』

「今晚は、祥子さん。お久しぶりです」

『お久しぶり、もう随分と会っていないわね』

「ええ、祥子さんもお忙しいことと思います。姉の見舞いに来られないくらいに」

『そ、それは……』

電話の向こうで、酷く狼狽している様子が分かる。何を今更狼狽えるのだろうか？ 祐巳から離れたのは自分なのに、

それとも、良心の呵責があるのか。

「用件を言います。明日、病院に見舞いに来てくれませんか？」

『病院に……』

躊躇の聲が聞こえる。そりゃ、今更見舞いには来づらいだろう。

「姉が、祐巳が呼んでいます」

『祐巳が……？』

不審の聲に変わる。

「祐巳が、目を覚ましました」

『本当!? それは本当なの!?』

歡喜と興奮の聲に変わる。

「本当です。二ヶ月ほど前に目を覚ましました」

『そんな前に!? どうして直ぐに言ってくれなかったの!?』
非難も混じる。

「色々事情がありますので、お伝えするのは控えておきました」

『事情? そんな、水臭い。ああ、もう、明日と言わず今から行くわ!!』

「いえ、明日にしてください。面会時間も過ぎてますので。それと、病院に着いても、直ぐ祐巳の病室に向かわずに、

まず俺を通してください」

『……どういこと?』

「でない、また大変なことになります。そして、祐巳が目覚めたことを、まだ誰にも言わないようにお願いします。それでは、くれぐれもよろしくお願いします」

『どういこと!? 説明して!』

「それでは」

『ちよつと、祐麒さん!? 祐麒さん……!?!』

遠ざけた電話口から、祥子さんの抗議の声が聞こえるが、無視する。明日になれば、事情は分かるのだから。

3

祥子は、祐巳の待っている病院へ急ぐ。昨夜は全く眠れなかった。しかし、祐巳に会えることを思うと、全く眠くない。祐巳が目覚めたことを、祐麒さんが祥子に伝えなかった訳も考えた。やはり、あのことを両親から聞いているのだろうか?

病院の面接時間の開始よりも、大分早く着いた。が、玄関には既に祐麒さんが待っていた。勘の良い彼のことだ。祥子が早く着くことを見越していたのだろう。

「ごきげんよう、祐麒さん……」

挨拶をかけようとして、彼の奇妙な出で立ちに気づく。花寺学院高等部の制服を着ている。彼はもう大学生になっていたのではなかったらうか?

「こんにちは、祥子さん。よく来てくれました」

その声は、どこことなく冷たい。

「祐麒さん、その服は?」

「訳は、先生から話してもらいましょう」

そう言つて、主治医の香月先生の部屋へ向かった。

香月先生の部屋を訪れる。彼女もリリアン女学園出身。在学中に猛勉強して、医学部に進んだ秀才だ。リリアン女学園から医学部に行く人間など十数年に一度しか現れない。

「まず、話しておかなければならないのは、彼女の『時計が止まったまま』と言つことよ」

「『時計が止まった』……?」

「そう。彼女は、祐巳さんは一年半前のままなの。あの事故があった日から、彼女の時間は止まったままなの」

「あの、それはどういことでしょう? 記憶喪失……、とは違ふんですか?」

事故にあった者が記憶喪失、ドラマなどではよくある展

開だ。

「全然違うわ。それは記憶が無くなるもの。祐巳さんの場合、記憶はあるの。ただ、その記憶が一年半前まで止まっているの」

「それは、もしかして……」

「そう、彼女は未だ高校二年生のままなのよ」

祥子の顔から血の気が引く。理解した。祐麒さんが花寺学院高等部の制服を着ている理由も。

「祐巳さんは、事故に遭った後、せいぜい数日しか眠っていないと思っっているの。いえ、記憶に大分混乱をきたしているから、そついつ時間概念まで理解しているかも怪しいわ」
 「なんと言うことだろう。祥子は声を上げることができなかった。」

「だから、祐巳さんにとっては祐麒君も高校二年生のまま。

あなたも高校三年生。分かるわよね？」

紅薔薇さまロサ・キネンシス、そう呼ばれるのは一年ぶりだろうか？

「脳に障害はないから、直に回復すると思うけど、今は余計な刺激は与えないようにね」

「はい……。分かりました……」

香月先生と、祐麒さんに連れられて、祐巳の病室へ向か

う。ここへ訪れるのは何ヶ月ぶりだろうか。あのことがあって以来、足が遠のいた。

祐麒さんが、病室のドアを開ける。窓の側にいた祐巳のご両親が、祥子の顔を見て驚く。そして、やはり気まずいのか、目を反らす。祥子は、ゆっくりと病室に入り、祐巳のベッドを見て、息を詰まらせた。

大分髪が伸びて、背中までできているのが目に留まる。祥子と同じくらいだろうか？ 身体は全体的に痩せこけ、以前のふくよかな抱き心地はありそうもない。顔も、タヌキ顔の面影はなく、ほお骨が出て、タヌキと言うよりはキツネ顔だ。

その変わり果てた姿を見て、涙がこみ上げてきた。祐巳の姿が滲んでくる。その時、祐巳が顔を上げ、祥子の姿に気づいた。

「お姉さま!!」

懐かしい祐巳の声、その声は変わっていない。二歩程進んだ所で、「祐巳!!」と叫び、一気に駆け寄って祐巳に抱きつく。溢れる涙が止まらない。

「お姉さま、お見舞いに来て下さったんですね……。ありがとございます」

「何を言うの？ 祐巳、当たり前じゃない」

「そんな、私の我がままと不注意で事故に遭ったのに……」

「そんな、祐巳はなににも悪くないわ！ 私が待ち合わせ場所に遅れさえしなければ、こんなことにはならなかったのよ!!」

「でも!」

「もう、これ以上言わないで！ 私は、祐巳が助かっただけで十分なんだから!!」

「はい……」

祥子と祐巳は、お互い抱きしめ合いながら泣き続けた。みき小母さまが、祐一郎小父さまにすがって泣く。小さく「ごめんなさい……」と声を振り絞っていた。祐一郎小父さまも、みき小母さまの肩を抱いてうなだれている。

「あ、お姉さま、ごめんなさい」

「なに？ もう謝らなくていいって、言ったでしょ」

身体を上げ、祐巳の顔を見つめる。やはり痛々しい。

「違っんです、そのことじゃなくて、あの、私、ロザリオを……」

「ロザリオ……?」

祥子の顔が曇る。もしか……!?

「ロザリオをなくしてしまったんです……。事故の時に……。祐麒にも探してもらったんですけど、見つからなかったって……」

祥子の顔から血の気が退く。

「そんな、気にしなくても良いのよ。ロザリオなんて無くたって、私たちが姉妹であることには変りないわ」

「お姉さま!」

今度は、祐巳が祥子に抱きつく。この感動的なやり取りを、冷淡に見つめる祐麒がいた。

祐巳の不在

1

「お姉さま、次はあれに乗りましょう」

「祐巳、あなたね……」

祐巳は、私の手を引いて、ぐいぐいと進んで行く。

「そんなに急がないで。それに、あれはフリーフォールじゃない」

「ジェットコースターではありませんよ?」

「確かにあれはジェットコースターではないわ。でも、高い所から落ちる物でしょう?」

「そうです。きつと楽しいですよ」

とても楽しめるとは思えない。第一、人間は本来地面に住むもので、高い所は本能的に避けるようにできている。それを何故、わざわざ自ら高い所に登るのか? しかもわざわざ落ちるのか?

「とてもそうは思えないわ」

今でさえ、自分の顔が強張こわばっているのがわかる。これですら実際に乗ったらどうなるのか? とてもそんな醜態しゆうたいを祐巳には見せられない。

「お姉さま、恐いんですか?」

「な、何を言うの!? そんなわけないじゃない」

「じゃあ、乗りましょう♡」

(しまった!)

まんまと祐巳にさせられてしまった。最近、祐巳の思惑おもわくに乗せられることが多いような気がする。

フリーフォールに乗り込むと、椅子が、ゆっくりと登り、最頂点に達する。

「ゆ、祐巳。あなた恐いでしょうから、手を握っておいてあげるわ」

「はい」

いけない。声が完全にうわずっている。手の震えも止まらない。祐巳にもこの震えは伝わっている筈だ。

「お姉さま、もし安全装置が外れて追突したら、私たちどうなるんでしょうね?」

どうして考えないようにしていることを、わざわざ言うのだろうか? 祐巳は私が恐がるのを楽しんでいるのだろうか?

「大丈夫よ。そんなこと起りっこないわ」

「ええ。でももし起ったら、こつなるんですよ……」

「祐巳……?」

祥子は、祐巳の方を振り向く。そこには、全身血まみれの祐巳の姿があった。

「祐巳ー!!」

祥子は、勢いよく跳ね起きる。いましがたの、自分の声以外は、時計の音が静かにするだけ。全身汗でぐっしょり。心臓がバクバク動いている。握っている手は温かい。心臓の鼓動と、手の体温が、祥子と祐巳がまだ生きていとう実感だ。

「小笠原さん、なんですか、今の悲鳴は!? 福沢さんに何かあったんですか!？」

看護師さんが慌ただしく病室に入って来た。祥子の悲鳴を、祐巳の容態が悪化したからだと勘違いしたのだろう。

「いえ、何でもありません。私が寝惚けていただけで」

「そう、良かった。あんまり驚かせないで下さいね」

「申し訳ありません」

「小笠原さん、疲れているんじゃないですか? 毎日お見

舞いに来てるんでしょう?」

「いえ、こんなの、祐巳に比べたら全然大したことないですわ」

「そう、ならいいけど……」

そうして、看護師さんは部屋から出ていった。病室には、祥子と祐巳の二人だけが残された。祥子は、祐巳の頬を優しく撫でる。

「祐巳、もう二ヶ月よ。いい加減起きてもいいんじゃないか?」

そう、あの忌まわしい事故から二ヶ月。外は寒くなり、病葉が舞う季節になっても、祐巳の意識は回復していない。CTでもMRIでも、脳への損傷は見当たらなかった。しかし、祐巳は眠り続けた。

2

「祥子、痩せたわね」

「開口一番に言うことがそれ?」

祐巳の病室に、令と由乃ちゃんが見舞いに来た。いくら病室に入って真っ先に目に入ったのが祥子とはいえ、怪我人よりも付き添いについて言及するのはどうか?

「怪我人は祐巳ちゃんだけど、祥子も病人みたいよ」

祥子は事故から、体重がめつきり落ちていた。ろくに食事を取らずに看病をしているのだから当然だった。むろん食事する時間はあるのだが、喉を通らなかつた。

「それで、祐巳ちゃんの様子はどうなの？」

「相変わらずよ。ずっと眠ったまま。お医者様も、もう取れる手段は全部取ったって……」

「そう、私たちは、ただ見守るしかできないのね」

「祐巳さん……」

由乃ちゃんが祐巳の頬を撫でる。祐巳は由乃ちゃんにとって、気を許せる数少ない親友の一人。どんなにか心配なことだろう。

「ところで、志摩子はどうしているの？」

志摩子も祐巳の親友の一人。とても心配している筈。

「志摩子と、乃梨子ちゃんは仕事。今、山百合会の幹部は四人しかいないから、大変なのよ」

四人。令と由乃ちゃん、志摩子と乃梨子ちゃん。祐巳はもちろん、祥子も勘定には入っていないなかつた。

「それで、私に薔薇の館に戻れと？」

祐巳よりも、山百合会の仕事を優先させると言うのか？
正直不愉快だ。

「そうじゃないわ。祥子、あなたこの二ヶ月間学校にほとんど来ていないでしょう？ 出席は大丈夫？ リリアン女

子大の推薦はおるか、卒業だつて出来るかどうか分からないわよ」

「なんだ、そんなこと」

「そんなことつて、重要なことじゃない」

重要なこと？ 普通ならそうかも知れない。けれど、今の祥子にとって、祐巳よりも大事なことはなかつた。実は、既に両親から登校の圧力はかかつていた。小笠原家の長女が留年などは、あつてはならないことだ。けれど、そんな体面や進路は、祐巳を放つてまで守らなければならないことではなかつた。

「祐巳が目を覚ました時、私は側にいてやりたいの。私は何もできない。でも、祐巳を一人にはしておけないわ」

令はうなだれる。祥子は頑固者だ。令の説得ぐらいでは主張を変えないだろう。

「祥子さま」

由乃ちゃんが口を開いた。

「私は、子供の頃から身体が弱くて、ずっと入退院を繰り返していました」

「知っているわ」

「その度に令ちゃんや、両親や、同級生が心配してくれました。私は、それがとても嫌でした」

「嫌？」

「どう言うことだろう？ 心配が迷惑なのだろうか？」

「仕事や学校を休んで付き添ってくれたり、寝ずに看病してくれたら。私が身体が弱かったばかりに、周りに迷惑をかけているのが嫌だったんです」

「そんな、迷惑だなんて」

「令ちゃんは黙ってて」

「……」

「祐巳さんが目を覚ました時、こんな様子さまを見たら悲しむと思います。自分のためにやつれて、自分のために留年した様子さまを見たら、きつと自分を責めると思います」

そうだった。祐巳ならば、きつと自分を責めるに違いはない。祐巳は全く悪くないのに。にも関わらず、悔やむ祐巳は見たくない。

「ごめんなさい。由乃ちゃん。今ので目が覚めたわ。そうね、祐巳のために、私がしつかりしないとイケないわね」

祥子の目から、涙が滲み出てくる。

「ありがとう。私、明日から学校に行くわ」

令と由乃ちゃんが顔を見合わせてほっとする。

病室を出たところで、令ちゃんが由乃に話しかけてきた。

「よくあの祥子を説得できたわね」

「ああいう人の扱いは慣れてるから」

「『ああいう人』？ プライドの高い人のこと？」

「いいえ、令ちゃんみたいなの」

「私？ 私と祥子って似てる？」

「そ。そっくり」

「どんな所が？」

「教えな〜い」

「そんなあ」

そう言う情けない所がだよ。でも、元がしつかりしてるだけ令ちゃんよりも扱いやすかったわ。

由乃は、こっそりと舌を出す。しかし、由乃はまだ祥子さまを過大評価していた。

3

暗い部屋。日はすっかり落ち、窓から入り込む月の光だけが、ベッドでうずくまる一人の少女の存在を示す。少女が左手を上げると、薬指に指輪が光る。頬を、光の筋が通る。

事故の様子は少しだけ聞くことができた。祥子お姉さまが待ち合わせの時間に遅れ、待っている祐巳さまの所にトラックが突っ込んだ。祥子お姉さまは遅れた理由は話さなかったが、瞳子にはわかっていた。それは、自分が祥子お

姉さまを引き留めたせい。いや、むしろ遅らせるために引き留めたのだ。もし祥子お姉さまが時間に遅れなければ、自分が引き留めなければ、祐巳さまはあの場にいず、事故に巻き込まれなかった筈だった。だから、祐巳さまを事故に遭わせた本当の原因は自分にあった。

祐巳さまが事故に遭ったのは、あくまで偶然。瞳子が祥子お姉さまを引き留めたのも、本来は事故には関係の無いこと。しかし、そのように考えることは瞳子には出来なかった。

瞳子は、もう一つの指輪を取り出し、眺める。左手にはめている指輪と同じ形。何故同じ物を二つ持っているのだろうか？

涙を拭くと、ゆっくりと左手の指輪を外し、取り出した指輪をその場所にはめる。瞳子の顔が、凜々しくなっていた。

「もうそろそろ、選挙があるわね」

「あ」

由乃さまが口を開くと、薔薇の館の面々は、それまで忘れていたことを思い出す。一年生は初めてのことだし、志摩子さまは既に白薔薇ロサ・キガンテイアさまなので、意識が薄かったのだ。

「私と志摩子さんは出るとして、紅薔薇ロサ・キネンシスさまの枠はどうす

るの？」

一同、顔を見合わせて無言になる。本来なら、この選挙には祐巳さまが出る筈だったもの。しかし、事故から四ヶ月も経つのに、祐巳さまは目覚める気配はなかった。

今、山百合会幹部メンバーの二年生は、志摩子さまと由乃さまの二人だけ。一年生は白薔薇ロサ・キガンテイア・アン・フウトンのつぼみの乃梨子さんと、黄薔薇ロサ・フエイト・アン・フウトン・フレイ・スールのつぼみの妹がいるが、この二人が紅薔薇ロサ・キネンシスさまになるわけにはいかない。自然と視線は、もう一人この場所にいる瞳子に集まる。

「瞳子ちゃん、どうするの？」

「私は、ただのお手伝いですから……」

「もちろん、無理に、と言っわけではないのよ」

「でも、瞳子ちゃんが一番適任よね」

瞳子は、この四ヶ月はずっと、ちよくちよく顔を出していた事故以前から数えると、半年以上も薔薇の館に手伝いに来ている。それに、瞳子は紅薔薇ロサ・キネンシス・アン・フウトンのつぼみである祐巳さまの不在を埋めるために手伝いに来ていた。そのことは口に出してはいないのだが、全員の暗黙の了解事項だった。

しかし、祐巳さまを押し退けて紅薔薇ロサ・キネンシスさまになることまでは考えていなかった。代理人が、そこまでしゃばった真似をして良いものだろうか？

「考えさせてください」

「そう、でも、良い返事を期待しているわ」
由乃さまは、既に薔薇さまに必要な「押し」を身に付けているようだ。

「おめでとうございます」
「おめでとう」

講堂前の掲示板は、拍手で包まれていた。生徒会役員選挙の結果が発表されていたからだ。もっとも、選挙と言っても候補者は三人だけなので、信任投票と言った方が適切かも知れない。

新しく山百合会幹部になるのは、続けて白薔薇さまになる志摩子さまと黄薔薇ロサ・フエテイダ・アン・フウトンのつぼみである由乃さまと、瞳子の三人だった。瞳子は誰の妹でもないの、昨年のように、別に候補者が出ることも予想されたが、リリアンの生徒には暗黙の了解があった。瞳子が次の紅薔薇さまだ、と。
「おめでとう、これで来年あなたは紅薔薇さまね」

瞳子の選挙を手伝った敦子あつこさんが、声をかけてくる。瞳子は、ゆっくりと首を振る。

「いいえ、私は紅薔薇ロサ・キネンシスには成れませんわ」
意外な答えに、瞳子の周りが静まる。黄薔薇ロサ・フエテイダさま、白薔薇ロサ・キガンティアさまは決まっている。残るポストは紅薔薇ロサ・キネンシスさましか

ない。それに、ずっと山百合会の仕事をしてきた瞳子が、次の紅薔薇ロサ・キネンシスさまだと誰もが思っていた。
「どういうこと？」

美幸さんが問いかける。瞳子は、ゆっくりと、周りの観衆にも良く聞こえるよう大きな声で宣言した。

「紅薔薇ロサ・キネンシスさまに相応しい方は他にいらっしゃいます。私は、その方の代理を務めるにすぎませんわ」

皆が息を呑んだ。誰もが、ただ一人の人物を思い出した。その人物のことを思い出して、すすり泣きも聞こえてきた。その人物は祐巳さま。今だ目覚めない紅薔薇ロサ・キネンシス・アン・フウトンのつぼみだった。

4

バレンタインデーの午後、薔薇の館は令さまの持つて来た手作りチョコレートでお茶会になっていた。三年生とは言っても、既にリリアン女子大に推薦が決まっている令さまは余裕がある。昨年は、つぼみフウトンの半日デート券を賭けた宝探し大会が行われたが、新聞部の部長が堅実けんじつな真美さまに代わったことや、祐巳さまに気兼ねきがねして、派手なイベントは控えられていた。

「祥子は、今日も休みか」

「ええ。今日も病院です」

「そうか。こういいう日くらいは顔を出してくれば良いの」

出席日数とリリアン女子大への推薦を辛うじて確保した祥子さまは、受験期になり三年生の出席が義務でなくなる、次第に学校に来る日数が減っていった。もちろん毎日学校に来る必要はない。しかし、こういいうイベントに顔を出さないのは心配になる。それに、祥子さまはどこまでも自分を追い詰める人だ。特に祐巳さまのことに關しては。

「今日は、皆でお見舞いに行こうか」
皆、異存はなかった。

卒業式、祥子さまは来なかった。昨日、令さまが心配していた通りとなった。昨日の電話では、ちゃんと「来る」と言っていたのに。

「小笠原祥子」

校長先生が述べる祥子さまの名前が、体育館に空しく響く。

リリアン女子大の入学式、祥子さまは辛うじて出席され

た。「辛うじて」というのは、朝、令さまが祥子さまの家に行き、無理やり引つ張って行ったからだ。でなければ、また卒業式のように病院に行っていたことだろう。

そして、令さまは祥子さまに休学手続きを取らせた。祥子さまが講義に出ないで病院に行くことは明らかだった。このままでは軒並単位を落して、成績は不可ばかりとなる。それならばいっそ、休学させて祐巳の看病に専念させる方が「まし」だと考えられたからだ。

これで、正当に学校を休み、枷が完全に外れた祥子さまの毎日は、家と病院とを往復するだけになった。以前にも増して、頭の中は祐巳さまのことばかり。それ以外には全く関心を示さなくなった。食事もろくに取らないので、段々と痩せていく。目は、死んだ魚のように濁り、祥子さまが放っていたオーラは、完全に消え失せていた。いや、生きるために必要な気力さえ無くなっているように見えた。

顔を上げるとカレンダーがある。ある日付に、丸が付いている。

「……今日は、あの日じゃない。行かなきゃ……」

九月。あの忌まわしい事故から、丁度一年が経った。瞳子は、久しぶりに祐巳さまの病院に行く。未だに罪悪感は消えない。おそらく、一生消えないだろう。いや、消してはならないものだ。

祐巳さまの病室の扉を、ノックして開ける。病室にはいつも祥子さまがいるが、返事がないことも多いので、確認せずにドアを開ける。

「あら？」

病室に祥子さまがいない。このようなことは初めてだ。祥子さまがお見舞いに来ていないことなどあり得ない。お手洗いにでも行っているのだろうか？

病室の奥に歩を進めると、違和感がした。この病室は、何かがおかしい。

「あっ!!」

その原因は、直ぐにわかった。ベッドに祐巳さまがいない。流石に、意識がない祐巳さまがお手洗に行くことは考えられない。だとしたら何処に!?

瞳子は、ナースコールを呼ぶのも忘れて、病室から飛び出した。病院中を探しまわる。すると、一階の廊下で、騒

ぎが起っていた。

「小笠原さん！ 止めて下さい!!」

「放して!! 行かせて!!」

「病室に戻りましょう!! 小笠原さん!」

瞳子は、人だかりへ歩を進める。看護師の方々と、祥子さまの悲痛な叫び声が聞こえる。

（こんな所におられたの？ でも、この騒ぎは何？）

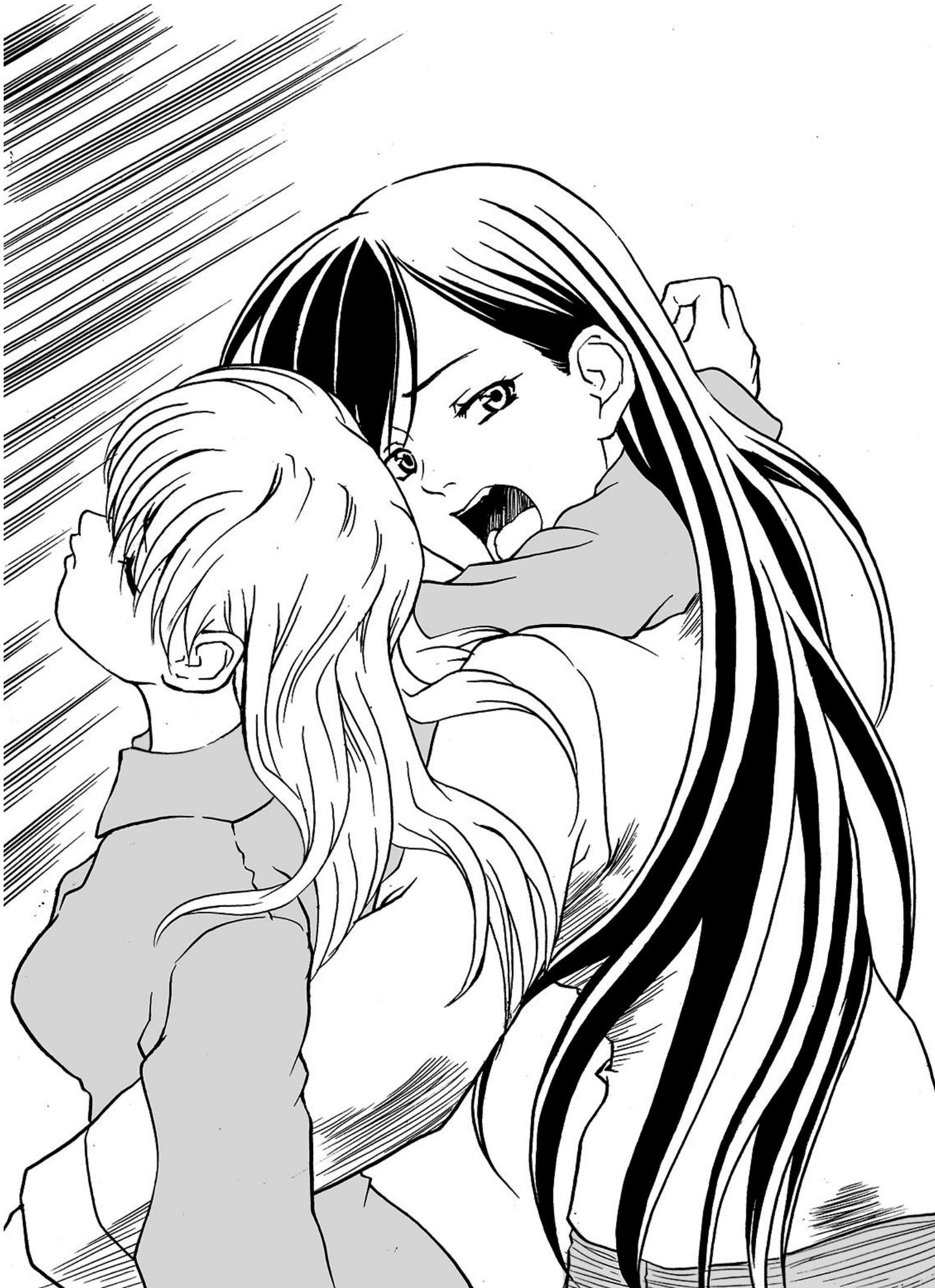
さらに近づくと、祐巳さまを抱き抱えた祥子さまが、看護師らに制止されている。一体何をしているのだろうか？ 祐巳さまの意識が戻ったなんて聞いていない。目を閉じたまま、腕を力なく垂らしているのがその証拠だ。

「放して！ 遊園地に行くの！ 今日は祐巳と一緒に遊園地に行く日なのよ!!」

「!!」

瞳子は、息を詰まらせた。目の前が真っ白になる。祥子さまは祐巳さまとの約束を果たそうとしていた。一年前に果たされなかった、瞳子の所為で果たされなかった約束を。

看護師さんの必死の説得に諦め、がっくりと跪いた祥子さま。祐巳さまがストレッチャーに乗せられて、運ばれていく。祥子さまは看護師さんに肩を借りて、その場を離れさせられた。瞳子も、その後を付いていく。



病院の第二待合室。第一待合室と違い、人も少なく、薄暗い。その長椅子に、祥子さまがうなだれて座っている。横に瞳子も座っているが、かける言葉がないのか無言のまま。その場所に、祐巳さまのご両親が現れた。二人とも、とても悲痛な顔をしている。みき小母さまは今にも泣き出しそうだ。

祐一郎小父さまが祥子さまに近づき、^{まひ}跪いて目の高さを合わせる。とても、険しい顔をしている。

「小笠原さん、先生から話は聞きました」

祥子さまが頭を上げる。

「私……」

「あなたの、娘を想う気持ちはよく分かります」

ここで、祐一郎小父さまは言葉を飲み込む。ためらいながら、次に繋げた。

「でも、もう、来ないでもらえますか」

祥子さまと瞳子の目が、同時に見開かれる。祥子さまの顔から、血の気が引いていくのがわかる。唇が細かく震えている。

「わかって下さい……。私たちも辛いんです……」

みき小母さまが泣き出した。祐一郎小父さまが、懐から光る物を取り出した。

「これを、お返しします」

「ああ……」

その光る物を差し出された祥子さまは、手で顔を覆い、^{せき}堰を切って泣き出した。

その物は口ザリオ。祥子さまと祐巳さまを結ぶ姉妹の証。お互い、端から見ていると過剰なまでに姉妹の解消を恐れていた二人だったが、この様な形で終わりが来るとは、夢にも思っていなかっただろう。

祐一郎小父さまは祥子さまに口ザリオを渡すと、ゆっくりと立ち上がった。一緒に、瞳子も立ち上がる。

「松平さん。小笠原さんのこと、お願いします」

「……はい」

祐一郎小父さまとみき小母さまは、肩を寄せ合いながらその場を去っていった。決して軽い気持ちで口ザリオを返した訳ではないだろう。祐巳さまが目覚めた時、口ザリオがなくて一番悲しむのは二人の娘なのだから。

もちろん、祥子さまと祐巳さまの絆の深さはわかっているし、毎日お見舞いに来てくれた祥子さまに感謝しているだろう。だからこそ、このまま不幸になる祥子さまを見るのが堪えられなかったのではなからうか。祥子さまに自立

して、幸せになつて貰いたかつたのではなからうか。
瞳子は、悲しみに暮れる祥子さまの肩を支えると、迎
の車の待つ乗車場へと歩いていった。

6

祥子さまがロザリオを返された翌日の放課後、瞳子は小
笠原家の屋敷へと向かった。清子小母さまが、酷く狼狽し
ている。

「どうでしょう？ 瞳子ちゃん。祥子、部屋から出てこ
ないの。運んだお食事にも全然手を付けないし」

「心配しないで、小母さま。祥子お姉さまはきつと立ち直
りますわ」

「でも、祐巳ちゃんがいないのよ。今日はお見舞いにも行
こうとしないし」

清子小母さまには、祥子さまがロザリオを返されたこと
は未だ話していない。

「祥子お姉さまは、祐巳さまから自立なさろうとしている
のですわ」

「そうかしら？」

「そうです」

自立だなんてとんでもない。一方的に縁を切られたのだ。

しかし、自立させなければ、祥子さまは立ち直れないこと
は確かだった。

祥子さまの部屋のドアを開ける。部屋は電気が点いてい
ず、暗い。ワゴンの上には、手付かずの食事が冷めたまま
置いてある。祥子さまはベッドの中で、俯せになって泣い
ていた。いや、涙は枯れ果て、呆けていた。時々「祐巳……、
祐巳……」と呟きが漏れた。

なんと無惨な姿だろうか。これが紅薔薇さまと呼ばれ、
皆の憧れと尊敬を集めた祥子さまだろうか。この一年、祥
子さまの状態は酷かったが、今日の状態が最悪だ。祥子さ
まの精神を辛うじて保たせていた、祐巳さまとの絆が完全
に断たれてしまったのだから。

「祥子お姉さま……」

瞳子は祥子さまに近づき、目の前で声をかけるが、全く
返事がない。祥子さまの瞳には、瞳子の姿は映っていない。
映っているのは

「祐巳、そこにいるの……？」

「……」

あらゆる意味でショックだった。自分が別の名前で呼ば
れたことだけではない。祐巳さまが祥子さまにとってどれ
だけ大事な存在であったか、その祐巳さまを奪ってしまった
責任の重さ、そして、祥子さまにおける自分の存在の軽

さ、これらを改めて認識したから。

「……お姉さま、祐巳はここです……」

「……祐巳。ああ、祐巳……」

祥子さまが瞳子に抱きついて嗚咽する。祥子さまは、祐巳さまの認識能力まで落ちていた。通常の祥子さまなら、祐巳さまと他人とを絶対に間違えたりはしない。祥子さまの精神は、祐巳さまと瞳子を区別できない程弱っていた。

瞳子の目からも涙がこぼれる。祥子さまの衰弱と、自分が祐巳さまの代用であることを呪って。

数ヶ月が過ぎた。瞳子は、小笠原家に毎日のように通った。祥子さまは段々と回復し、瞳子を瞳子として認識できるようになるまで、そう長くはかからなかった。祥子さまが回復するにつれ、小笠原家を訪れる頻度は減ったが、それでも週に最低一回は訪れた。

そして、また年が明けた。

「ねえ、瞳子ちゃん？」

「はい？ 祥子お姉さま」

「今までありがとう。私なんかのために、こんなに気を遣

わせてしまつて」

「何を言っんです。今更」

「瞳子ちゃん、こっちへ来て。あなたに渡す物があるの？」

瞳子が祥子さまの側によると、祥子さまはロザリオを取り出した。そのロザリオには見覚えがあった。

「祥子お姉さま、それは!？」

「私が、お姉さまから貰ったロザリオよ」

「そうではなくて!! それは祐巳さまのロザリオでは!？」

「そう。私が祐巳に上げて、祐巳のご両親から返されたロザリオよ……」

「受け取れません!!」

「そう、受け取れる訳がない。それでは、祐巳さまを裏切ることになる。」

「瞳子ちゃん。あなた今、生徒会役員なんですってね」

「ええ」

「それで、紅薔薇とは名乗ってないそうね」

「……」

「令から聞いたわ」

「令さまから……」

令さまは黄薔薇さまの姉であり、従姉妹であり、祥子さまの親友。瞳子の知らない間にお見舞いに来たか、電話

をするかして、近況を伝えたのだろう。

「祐巳に遠慮して、紅薔薇と名乗っていないと思うのだけれど、このままでは良くないわ」

「でも……」

「あなたが名乗らないと、あなたの妹も紅薔薇のつぼみと名乗れない。それでは、リリアンから、紅薔薇が永久になくなってしまおうわ」

「祐巳さまは……。祐巳さまはどうなるんですか!? 私は、祐巳さまを差し置いて紅薔薇になんて成れません!」

祥子さまはにつこりと微笑む。

「心配ないくていいわ。祐巳なら、あなたが紅薔薇になるのに反対はしないから」

「本当にそうでしょうか?」

「ええ、私にはわかるわ」

祥子さまの真っ直ぐな瞳。信念に基づく言葉には、何の揺らぎもない。

「さあ、受け取って。これは、紅薔薇に代々伝わるロザリオよ」

「はい」

祥子さまは、瞳子の首にロザリオをかけた。

7

再び、生徒会役員選挙が終わった。もちろん瞳子や乃梨子、そして黄薔薇のつぼみは当選を果たした。

「おめでとう、乃梨子さん」

「おめでとう、瞳子さま」

「ええ、ありがとう」

選挙結果の張り出された掲示板の前で、来年度の薔薇さま達が祝福を受ける。

「ねえ、瞳子。あなた今度も紅薔薇さまとは名乗らないの?」

「いいえ、乃梨子さん。私、今度は紅薔薇と名乗らせて頂きますわ」

「へえ。どういう心境の変化?」

「祥子お姉さまに諭されました。私が、リリアンの伝統を終わらせる訳にはまいりませんわ」

8

暫くして、花寺学院生徒会が挨拶にやってきた。以前は選挙が終わっての挨拶などはなかったのだが、リリアンと花寺との交流を以前よりも深めようと言う意見がどちらからともなく出て、親睦会がよく開かれるようになっていた。もちろん生徒会役員同士だけでなく、部活動を中心に一般

の生徒同士での交流も多くなって来ていた。なにせ女子校と男子校、出会いが少ない学校同士。男女の出会いには飢えているのだ。

とある会議室で、リリアン学園生徒会役員と花寺学院生徒会役員が向かい合って座っていた。既に生徒会長を引退し、お目付役めつけやくとなった祐麒が司会を務める。と言っても、既にお互い顔見知りなのであまりすることはないのだが。

さて、司会役という関係上、祐麒は立っていることが多い。すると、どうしてもリリアンの面々を見下ろす形になる。そしてリリアンの制服はセーラー服。セーラー服の特徴は、胸元を大きくえぐるような襟。学校によっては、胸元を隠すために三角のあて布があるのだが、リリアンの制服にはない。そのために、屈むとどうしても胸と服の間に大きな隙間が空いてしまう。そして悲しいかな男の性さが、その隙間に目が行ってしまうのは仕方のないことである。もちろん祐麒も例外ではない。

瞳子さんが発言を終えて座る。座る時、人間は前屈みになる。瞳子さんも例外ではない。祐麒は理性で胸元を見ないようにするのだが、目の端っこに映ってしまう。実は、人間の目は端っこの方が光を捉えやすい。天体観測の時などは、わざと視点をずらして星を見つけたりする。そして、祐麒は瞳子さんの胸元が光ったことに気が付いた。

（何だ？ 今の光は？）

ただの光なら、祐麒は気にも留めなかったろう。しかし、その光り方は見覚えがあった。

（そついや、さつき瞳子さんは『来年紅薔薇ロサ・キネンシスさまになります』と言っていたな）

祐麒の中で、線が繋がった。

親睦会が終わった後、祐麒は瞳子さん呼び出した。

「何ですか？ 祐麒さん。話って？」

「瞳子さん。俺、さつき見てしまったんです」

「見たって何をです？」

「瞳子さんの胸元で光る物を」

「胸元…？」

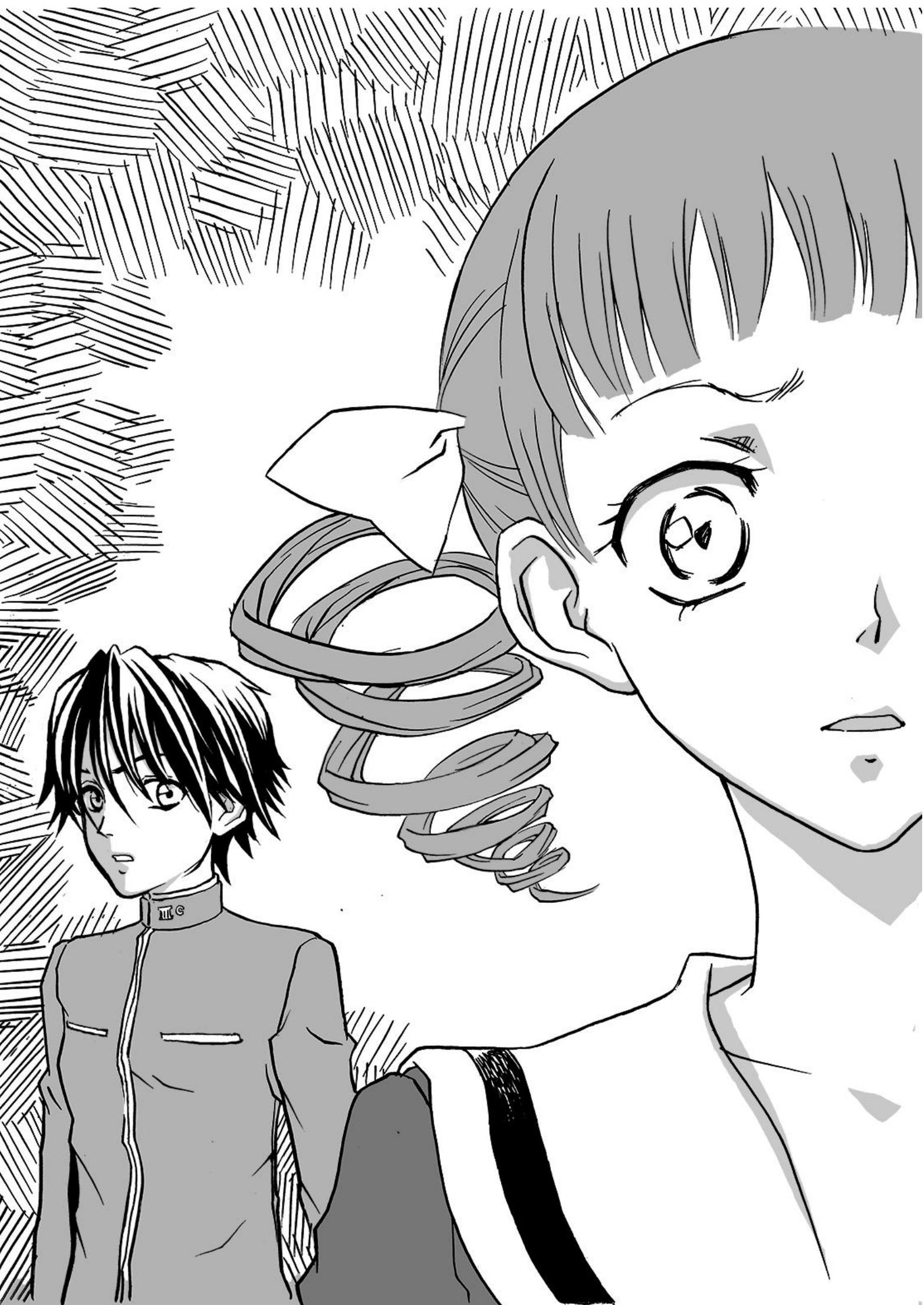
瞳子さんは、はつとして、胸元を押さえて後ずさる。顔を真っ赤にして、抗議してきた。

「祐麒さん！ 女性レディの胸元を覗くなんて、失礼ではありません！ せん!？」

（もしかして、祐麒さん気づいた!？）

「い、いや、偶然……」

「偶然で胸元を覗くなんてあり得ません！ 不愉快です!!」



祐麒に反論の機会を与えないよう捲し立て、パイと後ろを向いて、その場を去ろうとする。このまま逃げられては不味い。

「ロザリオ……」

その一言で、瞳子さんがビクリと身体を硬直させた。当たり前だ。

「ロザリオじゃないんですか？ その光った物は？」

「いいえ、ただのペンダントです。これは」

一呼吸置いて、瞳子さんが振り返った。顔は自信に満ちている。そっぴや、女優だと言っていたな。

「リアンの生徒は、あまりペンダントを身につけないと聞いておりますが」

「私は身につけます」

「よろしければ見せていただけますか？ ただのペンダントなのでしょっ？」

「ただのペンダントでも、祐麒さんに見せる必要はございません」

ギリ……。二人の間で、熾烈な争いが続く。

「先程、瞳子さんは『来年紅薔薇さまになる』と言っていましたね」

「それが何か？」

「俺、祐巳のロザリオをよく見てたから、光り方でわかるんですよね。どれが紅薔薇さまのロザリオか」

「くっ……」

瞳子さんは、ついに観念したのか胸元からロザリオを取り出す。それは、間違いなく祐巳のロザリオだった。

「騙されましたね。ロザリオの光り方の区別なんてつく訳ないじゃないですか。それに、祐巳は俺に滅多にロザリオを見せなかつたし」

「そんな！ 祐麒さん、非道い!!」

「俺も男優ですから」

瞳子さんが唇を噛んで悔しがり、祐麒を睨み付ける。

「そんなことより、どうしてそれを瞳子さんが持っているんです？ それはいつ目を覚ましても良いように、祐巳の病室に置いてあった筈ですが」

（祐麒さんは、知らないんだ。小父さまがロザリオを返されたこと）

祐麒がじりじりと瞳子さんににじみ寄る。瞳子さんは目を反らしながら、後ろに引いていく。

「ロザリオが病室にあったことを知っていたのは……。まさか祥子さん!？」

祐麒の歩が止まる。

「そっか、そう言うことか！ どおりで、最近病院に来な

「と思った」

「祐麒さん？」

「祥子さんが、いつまでも目を覚まさない祐巳を見限り、あなたを妹に選んだ！　そうでしょう!？」

「そんな、違　!!」

「もう結構!!　あなたもロザリオを受け取るなんて!」

「祐麒さん、話を聞いて下さい!」

「聞きたくありません。それでは」

今度は祐麒の方が振り返り、その場を去っていった。残された瞳子さんは、その場がっくりと膝をついた。

9

白い、静かな部屋。冬ではあるが、比較的暖かいので窓が開けられ、留められたカーテンの裾が揺らめいている。殺風景な部屋のベッドに、少女が一人眠っている。

その部屋へ、看護師が一人入ってきた。少女のマッサージをするためだ。ずっと寝たままだと関節が固まってしまったので、定期的にマッサージをして、関節を動かさなければならぬ。

「福沢さん、マッサージの時間ですよ」

語りかけても返事がないのはわかっているが、それでも

語りかけずにはいられない。寝ているのは、人形ではないのだから。

いつもと同じ行為。しかし、その日は何かが違っていった。看護師がベッドに寝ている少女に近づくと、か細い声が聞こえる。

「ここ、どこ?」

「……?」

看護師が少女の顔を覗き込む。よく見ると、少女のまぶたが開いて、こちらを見つめている。

「ねえ、ここ、どこ?」

「あ……あ……。先生ー!!　福沢さんが!　福沢さんが!!」

看護師は、病院には似つかわしくない大きな声を張り上げて、病室を飛び出していった。

再姉妹

1

「祐巳さまが目を覚まされた!? 本当に!？」

薔薇の館に歓声が上がる。祐麒さんからの電話を受けた由乃さまが、伝えに来たのだ。

「嬉しい。なら、早速お見舞いに行かなければなりませんね」

「それはちょっと待って」

「え?」

皆のはしゃぎが止まる。どういふことなのだろうか?

「まだ、目覚めたばかりで、身内と祥子さま以外は面会謝絶だつて」

「そんな」

「目覚めたことも、余り広めないで欲しいって」

「そこまで!？」

噂が広まると、祐巳の事情を知らないまま接し、状態が

悪化する可能性がある。祐麒は、その事を心配していた。
「大丈夫、祐巳さんのことだもん。きつと直ぐに良くなるよ」

「そう、ですよ。そしたら、皆でお見舞いに行きましょう」

(祐巳さまが、目を覚まされた……)

山百合会の面々が喜ぶ中、瞳子だけは朗らか朗らかになれなかった。もちろん、祐巳さまが目を覚まされたことは嬉しい。しかし瞳子は、事故の原因は自分だと、未だに思っている。そのために、手放して喜ぶことが出来なかった。

祐巳さまには、謝らなければならぬことが沢山ある。祥子お姉さまを引き留めて指輪を買って貰ったこと、そのために、祐巳さまが事故に遭ったこと、祐巳さまの代わりに紅薔薇ロザ・キネンシスをやっていること、祥子さまからロザリオを頂いたこと。幾ら謝っても謝りきれない。

今すぐにも謝りに行きたい。でも由乃さまの話では、瞳子はまだ面会できない。もしかすると、一生面会を許されないかもしれない。瞳子は、改めて自分の罪の重さを思い知った。

祐巳が目を覚まして、再び祥子の病院通いが始まった。以前と違うのは、ちゃんと夕方と休日にはしかお見舞いに行かないこと。高校に行っている筈の祥子が昼間からお見舞いに訪れると、祐巳に疑問を抱かせてしまうし、何より祥子が自分を見失わず、復学した大学生活を真面目に送っていたからだった。

祥子の献身的な看病により、祐巳はみるみる回復した。最初は時間概念自体の認識も怪しく、時間が進むと言うことを認識できなかったし、ほんの十分前の出来事さえ覚えていない時があった。しかし、段々と記憶力も回復し、時間経過の概念も認識しだした。

そして、新緑の風景や、自分の長くなった髪、痩せこけた腕を見て、不思議な顔をするようになっていった。だが、まだそれらが何を意味するのかまでは、理解できていないようだった。いや、理解したくなかったのかもしれない。

「お姉さま」

「なあに、祐巳」

病室の空気を入れ換えている祥子に、祐巳が呼びかける。

「私今、面会謝絶なんですよね」

「そうよ」

「でも、大分元気になりました」

「そうね、先生に面会謝絶を止めてもらっても良いか訊いておくわ」

「ありがとうございます。それで、その……」

「なあに？」

「最初に、瞳子ちゃんを呼んで欲しいんですけど」

「瞳子ちゃん？ どうして？」

「祥子の心に後ろめたさが起こったが、悟られないようにする。」

「私、事故の前に喧嘩してしまっただけです。そのことを謝りたいんです」

「どんなことで喧嘩したのか知らないけれど、瞳子ちゃんももう許してると思うわよ」

「でも、私は自分で謝りたいんです」

「わかったわ。面会許可が下りたら、一番に呼ぶわね」

「はい。ありがとうございます」

数日後、瞳子がお見舞いに現れた。念のために、香月先生や祥子お姉さま、祐麒さんも一緒につきそう。病室に入っ
て一番、祐巳さまの、大分回復したとはいえ、変わり果て
た姿に、シヨックを受ける。そして、瞳子を冷たく睨み付
ける、祐麒さんの視線がとても痛かった。

「瞳子ちゃん、お久しぶり」

「お久しぶりです。祐巳さま……。あれ？」

瞳子の目から自然と涙が溢れ、祐巳さまの姿が歪む。

「瞳子ちゃん、どうして泣くの？」

「祐巳さまの姿を見たら、自然と……。涙が……」

「泣かなくていいよ、瞳子ちゃん。それに、今日は私が呼
んだんだから」

「はい……」

「私ね、瞳子ちゃんに謝りたいことがあるの」

「え？」

祐巳さまが瞳子に謝る？ 瞳子が謝らなければならぬ
ことなら沢山あるのに、祐巳さまが謝ることとはなんだろ
うか。

「私が事故に遭う前、瞳子ちゃんと喧嘩したでしょ。その
ことを謝りたいの」

「そんなこと！ 私は、祐巳さまに謝られる資格なんてあ
りません!!」

「そうだよな」

「!？」

急に祐麒さんが割って入ってきて、この場にいる全員
の注目が集まる。

「資格なんか無いよな」

「祐麒、何が言いたいの？」

「瞳子さん、今も掛ける？ ロザリオ」

瞳子は、胸元を押さえて後ずさる。祥子さまの顔も青ざ
める。

「祐巳。祐巳が事故に遭ってから、一年半以上経ったんだ」

「一年、半？」

「そう、その間、色んなことがあったよ。俺は大学生になっ
たし、瞳子さんは紅薔薇さまロサ・キネンシスになったし、祥子さんからロ

ザリオを買ったし」

「瞳子ちゃんが、お姉さまから、ロザリオ？」

「そう、祐巳のロザリオが事故の時になくなったなんて嘘
なんだ。本当は、この病室から祥子さんがロザリオを持ち
出し、瞳子さんに上げたんだ」

「嘘……」

祐巳さまの身体が、ガタガタと震えだした。顔も青ざめ

てくる。

「祐麒さん、それは違　!!」

祥子さまは、否定しようとしたが口ごもる。祐巳さまのご両親が口ザリオを返したことを知ったら、それもショックが大き過ぎるから。

「嘘……。お姉さま、瞳子ちゃん、嘘だよね……?」

「う、う、う……」

瞳子は、答える代わりに病室を飛び出した。

「瞳子ちゃん!」

祥子さまが反射的に瞳子を追いかけようとするが、躊躇ちゆうちゆうして、祐巳さまを振り返る。祐巳さまは、両手で身体を抱え込み、ガタガタと震えながら俯うつむき、段々と呼吸も速くなっ

てきている。こんな状態の祐巳さまを残しては行けない。

「行って、お姉さま……」

「でも……」

「お願い、します。今は、瞳子ちゃんの方が、大事です……」

祐巳さまは顔を上げ、にっこりと微笑む。無理しているのがわかり、とても痛々しい。

「行って、お姉さま!!」

「ごめんなさい!」

祥子さまが病室を出たことを確認すると、祐巳さまはそのまま気を失い、ひきつけを起こす。

「ナース! 香月だ! 早く来い!!」

香月先生が、ナースコールで看護師を呼ぶ。暫くして、病室は騒然となった。自分のしたことを認識した祐麒は、部屋の隅でうずくまる。隣に、香月先生が立った。

「これで、満足か?」

「うっ……。うわあ!」

祐麒も、その場で泣き崩れた。

病院の庭を、瞳子が駆けていく。それを、祥子さまが追いかける。

「待って! 瞳子ちゃん!」

祥子さまの方が足が速いので、暫くすると追いついた。それでも、逃げるのを止めないので、腕を掴んで引き留める。腕を掴まれ、流石に観念したのか走るのを止める。

瞳子は振り返ると、祥子さまの胸にすがって号泣ごうきした。

「もう、駄目です! 祐巳さまは、祐巳さまは私のことを完全に軽蔑けいべつしました!!」

「そんなことないわ。祐巳はそんなことであなを軽蔑したりしないわ」

「でも、私は祐巳さまを裏切りました!」

「ロザリオをあなたに上げたことを裏切りというのなら、私の方が罪は重いわ」

「それだけじゃないんです。他にも、他にも沢山裏切りしました！」

瞳子の叫びは止まらない。とうとう懐に手を入れ、ロザリオを取り出した。

「これ、お返しします」

「そんな、駄目よ瞳子ちゃん」

「私は、元々ロザリオを受け取る資格なんてなかったんです！ これは、祐巳さまにお返し下さい!!」

「ああ、待って！」

そう言つて、無理矢理ロザリオを祥子さまに渡すと、再びその場から逃げ出した。祥子さまは、今度はもう追いかけなかった。

4

翌日、祥子が病室を訪れた。当日、病室に戻った時は面会謝絶になっていたからだ。病室に入ると、祐巳はベッドに横たわったまま、天井を見つめていた。祥子の姿を見つけると、起きあがる。

「もう起きあがつて大丈夫なの？」

「ええ、お姉……さまと呼んではいけないですよね」

祥子が瞳子にロザリオを渡した以上、二人は姉妹スーパーステール。妹フレイ・スーパーステール以外が「お姉さま」と呼ぶなど許されない。

「そんなことないわ。あなたは、いつまでも私の妹よ」

「でも、瞳子ちゃんに私のロザリオを渡したんですよ」

「……」

言葉に詰まる。妹を同時に二人持つことなど、許される筈がない。しかも新たに買い与えたロザリオではなく、祐巳に一旦渡したロザリオを、瞳子に渡し直したのだ。祐巳との姉妹関係を解消したと取られても、仕方のないことだった。

「教えて下さい。祥子さま。私は、一年半眠っていたんですよ。その間に何があったのかを」

「いいわ。教えてあげる。この一年半の出来事を」

そうして、ゆっくりと語り始めた。

「そうですね、それだけのことがあったんですね」

「そう、長かったわ」

最後は、二人とも涙目だった。

「私が、私が事故に遭ったばかりに、みんなが辛い目に……」

「何を言うの！ 祐巳が悪い訳ないわ。ブレーキが効かな

「なくなった原因だって、未だ分かっていないんだし」

「でも、私がつと良く注意していれば、避けることが出来ました」

「不可抗力だったのよ!!」

「祥子は、祐巳を抱きしめる。」

「そんなに自分を責めないで……。あなたより、私の方が罪が重いんだから……」

「祥子、さ、ま……」

「祥子は、懐から口ザリオを取り出す。」

「祥子さま、これは?」

「瞳子ちゃんが、あなたに返してくれって」

「そんな!? 受け取れません! これはもう瞳子ちゃんの物です!!」

「瞳子ちゃんの気持ちも分かかってあげて。もし口ザリオを、再び渡すとしても、あなたからでないで、瞳子ちゃんは口ザリオを受け取らないわ」

「祐巳は口ザリオを受け取り、ギュッと握りしめる。」

「分かりました」

「それから、祐巳」

「私のことは、『お姉さま』とお呼びなさい」

「でも! 私はもう妹では!?!」

「私は、あなたと姉妹を解消した覚えはなくてよ。例え

「『ふたまた二股』と呼ばれても良いわ。祐巳と瞳子ちゃん、二人とも私の妹よ」

「お姉さま!!」

祐巳は、力強く祥子に抱きついた。

5

数日後、瞳子ちゃんが病室を訪れた。本当は、祐巳は祥子さまと姉妹を復縁したその日に言付けを頼んで、瞳子ちゃんを呼んでいたのだが、訪れる決心が付くまでに時間がかったのだ。

「そんな隅っこに立っていないで、こっちに来てよ」

「でも……」

「いいから来て♡」

「はい」

瞳子ちゃんは、とても神妙しんみょうにしている。事故の前とは全然違う。彼女も、事故によって人生を大きく変えられた一人だった。

「瞳子ちゃん、目をつぶって」

「え?」

「つぶって♡」

「はい」

瞳子ちゃんは大人しく目をつぶる。チャリという音と共に、首筋に冷やりとする感触がある。目を開けると、首にロザリオが掛かっている。

「祐巳さま何を!?!」

「このロザリオは、もう瞳子ちゃんの物よ」

「そんな! 私はこのロザリオを持つ資格なんてありません!!」

「どうして? 瞳子ちゃんはお姉さまの妹なのでしょう?」

「いいえ! 祥子さまの妹は祐巳さまただ一人です!」

「くす」

「何がおかしいんですか!?!」

瞳子ちゃんは大きく腕を振り下ろす。祐巳さまに当たられて、瞳子ちゃん本来のオーバーアクションが戻ってきたようだ。

「お姉さまは、こう言われたわ。『二人とも私の妹よ』って」

「そんな馬鹿な!?!」

「お姉さまを馬鹿呼ばわりする気?」

「う〜」

(この感じ、懐かしい)

祐巳は、事故の前の瞳子ちゃんとのやりとりを思い出した。一年半もブランクがあったなんて嘘みたいだ。もっとも、

祐巳にとってはほとんど時間は経ってないんだけども。

「だから、妹同士仲良くしましょ♡」

「祐巳さま」

「なあに?」

「あの日、祥子さまが待ち合わせに遅れた訳を知れば、きっと私を軽蔑します」

「遅れた訳?」

どうして祥子さまが待ち合わせに遅れたことに、瞳子ちゃんが関係あるのだろうか? そんな話は祥子さまからは聞いていない。

「あの日、私が祥子さまを引き留めて、それで遅れたんです」

「そう」

「祥子さまを引き留めて、この……」

と言って、自分の左薬指の指に触れるが、急にポケットから別の指輪を取り出した。

「いえ、この指輪を買って貰っていたんです」

「そうなんだ」

「だから、祥子さまは待ち合わせに遅れて、それで祐巳さまが事故に遭われたんです」

「ふうん」

「『ふうん』って、怒らないんですか?」

「どうして？ そんなことじゃあ怒らないよ」

「……」

瞳子ちゃんの顔が、拍子抜けして途方に暮れている。そんな様子を眺めるのが楽しい。

「それよりも、その二つの指輪、同じに見えるんだけど」

「!?」

瞳子ちゃんの顔が真っ赤になる。何かあるな。

「そ、それはその……」

「白状しなさい」

「こちらが、祥子さまから買っていただいた指輪で……」

と、さつきポケットから取り出した指輪を見せる。

「こちらが……」

瞳子ちゃんが、ぼそぼそと口ごもる。

「何？ 聞こえない」

「こちらが……」

と言つて、左薬指の指輪を外して差し出した。

「私が、祐巳さまにプレゼントしようと思って買った指輪です！」

キョトン。その言葉はこう言う時に使つんだらう。祐巳は、今の瞳子ちゃんの科白を聞いて呆けた。瞳子ちゃんの顔は、耳までゆでだこのように真っ赤だ。目をつぶって、腕を精一杯突き出して指輪を見せている。

「そっか」

祐巳は、穏やかな顔で指輪を受け取り、自分の左薬指にはめる。

「瞳子ちゃんも付けて」

「え？」

「私と、ペアルックするために買ったんでしょ？」

瞳子ちゃんは、こっくりと頷く。祐巳の、にこやかな笑顔に促され、ゆっくりと指輪をはめる。二人は、とても満足した様子で見つめ合う。

不意に、祐巳が手を叩いた。

「あっ！ そうかあ。瞳子ちゃん、私が、お姉さまとデートするのが嫌だったんだあ」

「そ、そんなこと！」

「凶星でしょ」

「はい……」

瞳子ちゃんは、大分素直になった。それじゃあ、「褒美に」

「私が退院したら、一番にデートしよう」

突然の提案に、今度は瞳子ちゃんが呆けた。意味を段々と理解したのか、顔が明るくなっていく。

「はい!!」

うん。良い返事だ。これにて、一件落着。って、由乃さんみたい。

「祐巳さま」

「何？」

「祐巳さまは、復学したら何年生になるか知っていますか？」

「え？」

「祐巳さまは、二年生なんですよ」

「そうなんだ」

「と言つても、事故の前も二年生だから当然かも。でも、今の二年生には知ってる人は誰もいないんだ。それは悲しいな。」

「私は、三年生なんですよ」

「うん。お姉さまから聞いた。今、ロサ・キネンシス紅薔薇さまなんだってね」

「ええ。そして、私は未だ妹を作っていないんですよ」

「え!? ロサ・キネンシス紅薔薇さまなのに!？」

「ええ。三年生になるまで妹を作らない薔薇さまって、前にもいたそうなんです」

「聖さまのことか。やっぱり、悪い前例になってる。」

「でも、私、ようやく妹を作る決心が出来ましたわ」

「そうなの。おめでとつ」

「はい」

と、瞳子ちゃんはにこやかに笑って、掛けているロザリ

オを外し、祐巳の首に掛けた。

「祐巳さまが私の妹ですわ」

「……えーっ!!」

予想もしていなかった展開に、ただただ驚くばかり。病院中に聞こえるかと言つくらい大きな声で叫んでしまった。

「だ、だ、だ、だって、私の方が年上……」

「祐巳さまは二年生、私は三年生。私の方が上級生なんですよ」

「そ、そ、そ、そんな」

「拒否は許しません。ロサ・キネンシス・アン・ブトゥン紅薔薇のつばみ」

瞳子ちゃんは、つんとすまして上得意。やられた。

「じゃ、じゃあ、瞳子ちゃんが私のお姉さま？ 私には祥子さまが……」

「二人の妹がOKなら、二人の姉もOKですよね？」

「そ、そうなのかな？」

「はい。そうなんです。お姉さま」

「え、瞳子ちゃんの方が姉じゃないの？」

「祐巳さまは先程、私の首にロザリオを掛けて下さいました。だから、祐巳さまは私のお姉さまです」

「へ!? あれは、お姉さまから瞳子ちゃんへの分……」

「どのような形であれ、ロザリオを首に掛けた人がお姉さまです」

「そ、そんなんでいいのかな？ えっと、じゃあ、私たちがどういう関係なの？」

「祐巳さまは、私の姉であり妹。私も祐巳さまの姉であり妹なんです」

は、破天荒だ。今まで、妹がロザリオを返して黄薔薇革命なんてことがあったけど、ここまで滅茶苦茶な関係、紅薔薇革命なんてレベルじゃない。

「じゃあ、私も瞳子ちゃんのこと、『お姉さま』と呼んだ方が良いかない？」

「別に今のままで結構ですよ。私はお姉さまの妹なんですから」

あ、そうか。だから私のことを姉だと言ったんだ。

「さ、お姉さま。早く元気になって退院して下さい。今、山百合会は紅薔薇のつぼみがいなくて人手が足りないんです」

あはは。一年半眠ってても、やっぱり紅薔薇のつぼみなのね。あれ？

「ねえ、瞳子ちゃん。私を妹にしたのって、私を紅薔薇のつぼみでいさせるため？」

「じゃあ、私はこれで帰りますね。山百合会の仕事が忙しいので」

「あ、待って！」

「それじゃあ、ごきげんよう」

帰っちゃった。こんな時間（もう夜）から山百合会の仕事なんてある訳ないのに。でも、ま、いいか。これ以上照れ屋の瞳子ちゃんを困らせても悪いし。

もう暫くしたら夏休み。いつ退院できるか分からないけど、二期期には学校に行けるようになりたいな。どんな学校生活になるか分からないけど、きっと楽しいものになる。だって、私には姉も妹もいるんだもん。

あとがき

皆さんごきげんよう。PARALLEL ACT主催者TomOneです。さて、今回の本はいかがだったでしょうか？ 夏コミでは二章まででしたが、ちゃんと全章書き上げることができました。

元々、'04年4月7日、「レイニーブルー」を読んだ直後、ふつと『君が望む永遠』と『マリア様がみてる』が一緒になったらどうなるか？ と言つのを思いついたのが始まりです。配役が予想以上に合っているぞ、と構想を練り始めました。

そんな時、久野さんが「rec animationで、『それでその40本なりのストーリーや登場キャラが全部頭に入っているのだろうか…頭の中で複数ののが融合したりとか』と投稿し、笠原さんが『ただ、2次創作な活動をされる方々にとって「頭の中で複数ののが融合したり」というのは、創作活動におけるスパイスみたいな役割を果たすこともあるかと思う

ので、それほど問題があるとは思えません。』とフォロワーを付けました。

ならば、と言つことで少し暖めていた『マリア様が望む永遠』の粗筋を投稿しました。それが結構受けたので、もっと練って本にすることを決意しました。なお、「キツネ顔」は渋谷さんのフォロワーから貰いました。

これがこの本を発行することになった経緯いきわづらひです。元が「レイニーブルー」を読んだ直後に浮かんだため、事故は九月よりも、六月ぐらいに起こった方がすっきりしたかも知れません。しかし、第三章の展開を考えると、九月に持つてこざるを得ませんでした。九月だと、可南子も登場している筈ですが、絡めることが出来ませんでした。可南子は好きで、妹は可南子派なんですけどね。

祐巳が眠り姫になっていますが、当然その間に、たい焼きを万引きしてたりとか、祥子さまの右手になってたりとかはしていません。白い飛行機を眺める夢ぐらいは見ているかも知れませんが(笑)

最後のオチは、自分でもちよつと悩んでいます。ハッピーエンドにはなりましたが、一歩間違えると、いや既に「なんだかなあ」って展開ですので。ま、本人達が幸せならそ

れで良いでしょう。うん(笑)

今回の本は、縦書きです。『電腦天使』なんかは、妄想本も横書きで出しましたが、『マリみて』の妄想本は縦書きだろうと。でも、LATEX_{2.ε}で縦書きは辛いですね。美文書にアスキーに、藤田先生やマクロの本まで動員してようやく今のようになつてます。いや、藤田先生の本は良いですね。と言うか、藤田先生の本がなければできませんでした。

そして、今回の本は表紙と挿絵が付いています。最初は自分で挿絵描こうかと思ってたんですが、時間が無いのと、何より画力が無いので(爆) 絵描きに依頼しました。その為、まともな絵が付いています。

タイトルロゴは、StarSuiteでEPSを作って、PhotoShop CSに読み込ませ、合成しました。何か良い感じになったと思います。

さて、次の予定ですが、第二期感想本を春と夏に出す予定です。妄想本は、この後特に出す予定は無いですが、良いアイデアが閃いたら出すでしょう。

それでは、皆さんごきげんよう。

'04年12月25日

TomOne

1975年6月28日、熊本生まれ。蟹座、O型。過去に『新世紀エヴァンゲリオン』『家なき子レミ』『救命戦士ナノセイバー』『学校の怪談』『天使のしっぽ』『電腦天使』の同人誌を発表する。

マリア様が望む永遠

PARALLEL ACT SERIES

2004年 8月15日 第1版発行

定価はカバーに表示

2004年12月30日 第2版発行

してありません

著者 TomOne
発行者 村上智一
発行所 PARALLEL ACT

URI <http://kikyou.sakura.ne.jp/~tomone/>

E-Mail tomone@kikyou.sakura.ne.jp

印刷機 あなたのプリンタ

Printed in Japan

造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替えいたします。まずは、当サークルにご連絡ください。

送料は当サークル負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したもの、自ら印刷したものについてはお取り替え出来ません。

